

「限界芸術・死亡率・H. curans・シンギュラリティ・TPPと薬価」

色平 哲郎

(JA 長野厚生連・佐久総合病院 地域医療部 地域ケア科医療/健康医療開発機構 理事)

皆さん、初めまして。色平（いろひら）と申します。長野県の善光寺から来た僧侶でございます。というのは嘘ですけども、僧侶のような仕事をしているお医者さんです。村で10年以上診療所長をやっております、高齢化が40%を超えた現場で過ごしてまいりました。お坊さんもお医者さんも嫌われていますよね。これは皆さん、笑っていただかないといけないんですけども。この場に弁護士さんもおいでになるかもしれませんが、この三つの職業は共通な点があります。人のご不幸でご飯を食べているという点です。聖なる仕事であるといわれ、プロフェッションともいわれてきたんですけども、一般的には人のご不幸で生きているという意味で、誤解にさらされやすい仕事ではないかと思えます。そういう意味でも、今日のセッションでは薬価が上がるということで、目の前のお医者さんを責めまくるような雰囲気、今後広がるのではないかとというふうにしどきどきしております。限界芸術という言葉は、皆さんご存知ないと思いますが、これはマージナル・アート（Marginal Art）の訳でございます。佐久総合病院は「さけそうどう病院」とも呼ばれており、村の人たちとお酒を飲んで仲良くすることを大事にしてまいりました。そういう意味で、お酒が文化であるということと同じような言い方で、医療もまた文化であるというふうに70年前から言ってきた、変わった病院であります。

今日のお題の限界芸術でありますけれども、一般の生活と芸術との間に広がる巨大な領域でありまして、専門家でない一般の方々によって作られ、一般の方々が楽しむ、と。つまり、プロの道を通らない人の作品はすべて限界芸術なのだ。私も含まれていると思えます。暮らしを舞台に、人々の心の中にわき上がり、ほとばしってきたような表現。（プロの）噺家がやる落語は、入らないのかも。なんと、それは私の日常生活そのものであったということ、ちょっと申し上げましょう。盆踊り、生け花、茶の湯、羽子板、習字、それからゴシップですね。冗談とか、今日の私のような漫

談なんかも入っていると思っております。たばこで寿命が2~3年短くなるということは有名なことですが、皆さんは健康で長生きしたいわけですよね。できるだけお医者さんにはかからないで。そういう中で申し上げますと、信州は長生きで有名でしょ。日本一どころか世界一ですよね。しかも医療費が少なめだというのは、もちろん私も医者優秀なんではありませんね。皆さんが楽しく生きているからなんです。ビッグデータの時代になりましたけれども、小学校区ごとにデータをとって、みんなが楽しく生きている、みんなが嬉しく生きている。そういう仲間意識のあるところは、なんと転倒する人も少ないし、寝たきりになる人も少ないし、認知症になる人も少ないし、死亡率も少ない、ということが明らかになってきたんですね。今日はゲノムの解析のビッグデータの話が多かったですけども、ソーシャル・エビデミオロジー（社会疫学）とよばれる分野なのですが、生活空間で健康指標がいったいどうなっているのかということについては、必ずしも医療の寄与ではなく、皆さん自身のご努力によって健康度が上がるということ、これは長野県で実証されたことではないかと思っています。そして、友達が多いと、趣味が多いと、先ほどのような限界芸術を楽しんでいると、寿命がまた数年延びるというデータが出てきたわけです。恐るべきことだと思います。すべての人が参加できる活動として、友人が増える寿命延長活動としての限界芸術。さあ、限界芸術という言葉は難しいですけども、皆さん、この本はご存知ですか。「逝きし世の面影」です。当てないからぜひ、知っている人は手をあげてくださいか。これは江戸時代のわれわれの祖先の方々が、「子どもの樂園」といわれたこの日本社会がどのぐらい笑顔で満ちていたのかということを描いた、今では忘れられてしまった日本のあり方です。そこに（ハンドアウト）書いておきましたね。渡辺京二という方の著書です。農民芸術といえば宮沢賢治ですけども、限界芸術の先駆者としても考えることができるそうです。

では、限界芸術を実演してみましょう。「雨ニモアテズ」って、皆さんご存知でしょうか。「雨ニモアテズ 風ニモアテズ 雪ニモ夏ノ暑サニモアテズ ブヨブヨ体ニ タクサン着コミ 意欲モナク 体力モナク イツモツツツ不満ヲイツテイル 毎日 塾ニ追ワレ テレビニ吸イツイテ遊バス 朝カラアクビ ヲシ 集会ガアレバ 貧血ヲオコシ アラユルコトニ 自分ノ コトダケヲ考エテカエリミズ 作業ハグズグズ 注意ハサンマン スグニアキ ソシテスグワスレ 立派ナ家ノ自分ノ部 屋ニ閉ジコモツテ 東ニ病人アレバ医者ガワルイトイイ 西ニツカレタ母アレバ養老院ニ行ケトイイ 南ニ死ニソウナ人 アレバ寿命ダトイイ 北ニケンカヤソショウガアレバ ナガメ テカカワラズ 日照リノトキハ冷房ヲツケ ミンナニ勉強勉強 トイワレ 叱ラレモセズ コワイモノシラズ」これは有名な 農民芸術、つまり限界芸術です。私の言いたいのは、自分なりに素人芸でパロディを言えば、多少皆さんに笑っていただけるんじゃないかと思ったんですけれども、うまくいきませんでした。すべてしてしまいましたけれども、こういう笑いこそが、実は医療よりも健康寿命を延ばしているということが、実証されつつあるということが、最初に申し上げたいことでございました。では2 番目です。

お題その2。人間の死亡率は、何%でしょうか。そうですね、100%なんですね。100 年後にわれわれ、この場にいる人は一人もおいでになりません。皆さん、死は恐ろしいですか。もちろん恐ろしいです。痛みや苦しみを伴っています。しかし、虹が出ることはありませんか、皆さん。虹を見たときに、永遠を見ますね。虹ははかないものですよ。人と同じようにはかない虹の中に永遠をみってしまう私は、何なんでしょう。僕は虹の向こう側に、自分が会えなくなった、既に亡くなった人々の想いを感じることもあるんです。皆さんもそういう瞬間がありませんか。私は、雨上がりの虹を見たときに、彼や彼女の言葉を思い出します。でも、すぐに消えちゃうんですね。今、むき出しの死、身も蓋もないような死がわれわれの身の回りにあります。もしかすると、罪深いお医者さんたちの手によって、ということもあるかもしれません。では、皆さんに聞いてみましょう。もしも、死なないということ、不死が実現したらどうなると思いますか。皆さん、正気保てますか。もし、今日の議論の中で、老化現象を

止めるという薬があったら、これは嬉しかったね。でも、なかなかそうではない。そういう意味で、私が申し上げたいのは、死は恐ろしいのかということです。人は死ぬことによって、愛をはぐむことができるという。ここで先ほどおっしゃった話になりましょう。死を共有するような、そんな恐ろしい大災害や大震災の後、突如として人は水や食べ物を分かち合い、場に秩序というものが自生的に生まれ、国家の関わりなしに安定した社会を作ろうとしていました。これは確かなことです。なぜ、そのとき、特別な共同体が立ち上がったのだろう。どんな大惨事であっても意外に冷静に行動し、なおかつお互いを助け合うような、即席のユートピアが形作られるという共通点が、確かに人類にはあります。黙祷という言葉、黙祷といって1 分間。これは、特定の宗教儀礼とは関係のない意味で、追悼というとき、僕は目をつぶるといつも虹を見ているんですね。皆さんはどうですか。私は1 分間の黙祷というと、必ず虹を見ようとします。そしてそのときに、思い出そうとします。死は、今でこそ語り得ないものになっています。でも、この本にも（「逝きし世の面影」）ありますが、かつて江戸時代のわが先祖たちは、いつも死者の隣にいました。生のすぐそばに死がありました。そして、死は文化の中に飼い慣らされていたし、語り継ぐこと、語られることがむしろ当たり前だったという、そういう山の中の、お互いさま、おかげさまでの世界で、私は10 年以上暮らし、子育てをして、大変幸せでありました。「今、いのちがあなたを生きている」（真宗大谷派の親鸞聖人750 回忌御遠忌のテーマ）。仏教的ないい方だと思いますね。器としての人間であって、「死は決して敗北ではない」というふうに、私は思います。

3 番目。クイズ。朝は4 本足、昼は2 本足、夕方は3 本足、この生き物は誰ですか。これは、有名なスフィンクスの謎ですよ。それでは皆さんに対して、ケアの中で生まれ、ケアと共に生き、そしてケアの中で死んでいく存在とは。これはホモ・クーランス（Homo curans、気づかう人）というふうにいわれます。ホモ・サピエンスならぬ、ホモ・クーランス、われわれのことですね。人間のことです。お互いさま、おかげさまでといわれるように、医者が誕生する以前から、昔から、人は人のお世話をしてきたという意味です。皆さ

んの中でハイデガーの「存在と時間」を読む人がいたら、42節をご覧ください。そこにケアの女神様が出てきます。ケアの女神はラテン語でクーラというんです。クーラはギリシャ神話ではペルセポネーのことです。そして、ケアの神話（クーラの神話）という、2,000年前の詩が引用されています。このケアこそが、もっとも大事である。お互いに気遣う、互いの「憂い」を気遣いあうという、このケアという感覚は、人類古来のものであります。科学が発達する前から、薬ができる前から。薬というのは技術でありますけれども、同時に商品でもあります。そういう意味で、商品と技術とがひとつの事物のなかで表裏の関係になっていることが、今回の第一部の大きなテーマであったと思います。しかし、それを外して考えると、われわれはケアしあう存在として人になったということ。ケアというものを、クーラというものを否定しましょう。否定するには、前に「セ」をつけるんですね。ラテン語系統は、前にセをつけるんですけども、セ・クーラ。セクハラではありません。セ・クーラというのは、相手の憂いを見てはいる、のだが助け舟はださずに控えておく態度、ということです。あえて見ないでおく。それが、セキュア（secure）という英語になっています。現在のわれわれがセキュリティ社会に住んでいるとするならば、それは、相手のケア（＝憂い）が見えてはいるのだが、見なかったことにしてケア（＝配慮）はせずにおくという態度の中にあるんだとすると、なかなか難しい世の中になってきました。地球上で人類がばらばらで、争いごとばかり、戦いばかり。でも、人類は一緒のものであります。そういう意味で、ばらばらで一緒であるということが、人の本質だとする。書いてみましょう。「多即一」と書きますね。これは逆にしますと、「一即多（いっしょくた）」と読めるということです。この「多即一」というのは、西洋的な感覚ではございません。非常に東洋的なものであるというふうに考えられています。唯一の真理は存在するし、真理である以上、それは唯一でなければなりません。複数だったら真理ではありません。でも、この世は所詮相対的な場ですので、この世でも真理は、また立ち現れ方は多元的なものでなければいけない。ならざるを得ない。また、言語を超えた超越的な真理なるものを、人間の持つ不完全な相対言語では表現しきれないだろう。これが、東洋的な意味での真のとらえ

方です。西田幾多郎がいうように、われわれ人間には定めがあって、真理の影しかとらえられない。唯一の真理ということ、それは実は「語り得ないもの」でありました。語り得ないはずだった真理を語り尽くそうとする現代は、一方では気楽に語りあっていた、日常的な出来事であった死を語り難いものにしてしまっている。それが現代化ということなのか。真理をあえて語りつくそうとすることによって、さまざまな困難が生じているのかもしれないと感じます。

次は、シンギュラリティですね。これは技術論です。技術論ということは、今日のテーマの第一テーマですよ。健康と医療に関し、医薬なる技術が商品でもあるという、この二面性についてのディスカッションであったと思います。シンギュラリティは、人工知能、AIが人間の能力を超え、そこに出現するであろう恐るべき未来。AIの父、マービン・ミンスキーさんが亡くなりましたけれども、また、Googleが有するAlphaGo（アルファ碁）が韓国の棋手に勝ったということは、大変な衝撃であります。スティーヴン・ホーキングは、一度述べました。AIの開発は、人類の終わりを意味する。もし、医薬品が自動的に開発されていくと、何が起るのか。申し上げましたように、老化を止める薬ができればいいですけどね。でも、どっちにしても、悪夢になりかねない。私は二十数年前に京大（京都大学）の学生だった頃、沼（正作）先生とか本庶（佑）先生の講義を受けていましたけれども、その頃のことです。医療に、もし技術イノベーションが本当に進んでしまつたら、AIが出てきて医者なんて不要になっちゃうかもしれないと、二十数年前の私はびびっていたんですけども、当時はまだなかなかそこまではいかなかったです。信仰が消え、ケアが消え、そして文化が消える。人類まで消えるのではないかと、「唯一の真理」を求めまくることが、われわれの暗黒の未来を産むのではないかと、当時考えました。第一次医療技術革新というのは、戦後の抗生物質。結核患者さんたちが、みんな若くして死んでいった人たちがしかし、生き延びるところか、結核病棟が不要になり、ベッドが不要になり、そして、ずっと生き延びて税金を納める側にまわって天寿を全うする。これが「完全技術」といわれた、第一次医療技術革新の衝撃でした。でも、われわれが今持っている医療技術は、第二次医療技術革新に由来する「不完全技術」です。診断はつづが、

治療しきれない。そこに第三次の波が二十数年前に日本に及んできたとき、中川米造先生の弟子でもあって、私は京都で焦りまわりました。しかもその波は実は今日来たんだということ、さっきまでの研究者の方々にお伝えいただいて、ちょっと頭が混乱しています。武谷三男は設計主義的にとらえたんですけれども、しかし、昨今とはとにかく、イノベーションで経済が活性化するのであれば善であるという、素朴な科学、ユートピア主義が強いのではないかと思います。目先の因果関係の世界に固執する傾向が広まっているのではないかと。どんなことでも、手っ取り早く利益を生むものが絶賛されてしまう。科学技術、現代は、命の秩序を壊してはいないか。生命科学は、死の個人化や孤立化を招いてはいないだろうかというふうに危惧を持っています。ここで引用しましょう。「大学は職業教育の場ではありません。大学は、生計を得るためのある特定の手段に人々を適応させるのに必要な知識を教えることを目的とはしていません。大学の目的は、熟練した法律家、医師、または技術者を養成することではなく（！）、有能で教養ある人間を育成することにあります」150年前の、ジョン・スチュアート・ミルの大学に関する講演録ですね。19世紀においては、大学に行く人間は非常に少なかったですけれども、なんと、医学部は、本来大学ではなくて職業学校であるというふうに看破しています。ミルは、この講演の中でこうも言っています。「自分自身と自分の家族が裕福になることあるいは出世することを、人生の最高の目的であるとする人たちに大学が占拠されないように、絶えざる警戒が必要である」と訴えている。もちろん、これは私が言っていることじゃありませんよ。ジョン・スチュアート・ミルが言っていることでありまして、私が言えることは、「大学は合コンの場ではない」という程度のことであります。

私は足掛け6年間、TPPについていろいろ考えてきました。決して反対ではございません。「くれぐれも慎重に」、そして「米価は下がるが、薬価は上がる」というふうにくりかえし申し上げてきた次第です。そして今、来年が明治150年です。今、日本には大きな隣国が二つあります。一つは人口が世

界最大であり、一つは国土が世界最大であります。そしてもう一つ別の隣国は、世界最大の軍事力と経済力を持っていますが、なんとこの「警察官」が引退モードに入りつつありまして、近い将来、この大事な警察官がグアム以西あるいはハワイ以西から引き上げたときのことを、心配しています。本気で心配しています。地球人類が「ばらばらで一つ」ということを本気で心配した人として、マハートマ・ガンディーという方がおいでになります。殺し合いをやめ、みんなが納得して共存するにはどうしたらいいのかということを考えた方です。彼の東洋的な回答が、漢字で言えば、「多元主義的一元論」というものです。マハートマ・ガンディーはこれを山に例えたわけです。頂上は一つです。しかし、頂上に至る道は無数にあります。どの道をたどってもよい。最終的に達成する頂上は一つなのだ。「たどる道の違い」を、「真理の違い」と混同してはいけません。これが、ガンディーの語ったことです。私なりに言うならば、「違いと間違いこそが大事」。違いが、間違いではないというようなことです。ガンディーさん、ガンディーさん、世界人類の深刻な対立、対抗関係の処方箋として、どんなお薬が効きますかねと、聞いてみましょう。ふむふむ。マハートマ・ガンディーのお答えは、「アネーカントヴァーダ」でした。サンスクリットですね。このアネーカントヴァーダというのは、ばらばらで一緒ということです。「一即多（いっしょくた）」ということです。真理追究においては、唯一性を否定することです。英語でいうと「Many-sidedness of the truth」というような言い方になります。言語、そして武器が生まれるずっとずっと以前から、ばらばらで一緒の人類は、「お互いさま」、「おかげさまで」の気持ちを使ってケアし合ってきたことが、ホモ・クワランの実像ではないかと思えます。人類共通の運命である死を語り継ぐことが、今こそ大事だと思う。しかし真理なるものについては、できるだけ決めるつけることをやめ、一方的に語ることを控えておいたほうがいいのかなと、今、感じています。マハートマ・ガンディーの言葉で終わります。「明日、死ぬと思って生きよ。永遠に生きると思って学べ」ありがとうございました。